群教セ	G06 - 02
	平15.211集

仲間とかかわり合う力をはぐくむ体育科指導の工夫

── ボール運動にコミュニケーションルールを取り入れて ──

長期研修員　　深代　勉

《研究の概要》

本研究は、ボール運動にコミュニケーションルールを取り入れることによって、仲間とかかわり合う力をはぐくもうとしたものである。具体的には、小学校高学年のソフトバレーボールの学習において、「仲間のよいプレーに誉め言葉をおくる」「仲間のミスに励ましの言葉をおくる」などの約束行動をコミュニケーションルールとしてゲームや話合いのルールに位置づけ、仲間と肯定的・積極的にかかわれるようにした。

【キーワード：体育　ボール運動　バレーボール　コミュニケーション　仲間づくり】

Ⅰ　主題設定の理由

今日、地域社会では人と人とのかかわりが希薄になり、子供の遊びも様変わりし、子供同士の豊かな交流が少なくなってきている。そのため、集団遊びを通した仲間関係から社会性を身に付ける機会が減って、子供たちのコミュニケーション能力の不足も目立ってきた。今、学校では、子供同士の豊かなかかわり合いによって積極的に社会性を育て、よりよい人間関係を築いていくということが重要な課題になっている。

体育科では、心と体を一体としてとらえ、運動を通して様々にかかわることで仲間のよさに気付き、運動の楽しさや喜びを共に味わうようにすることが重視されている。

しかし、今までの体育の授業を振り返ると、運動の苦手な子供は、仲間意識が高まらず、運動の楽しさや喜びを十分味わえない場合がある。また、運動が得意でも、感情を表に出すことのできない子供は、仲間との連帯感が生まれにくい。さらに、仲間のミスを非難したり、仲間の意見に耳を傾けなかったりする子供もいる。

これは、教師が体育の授業において、よりよい人間関係を築くことが重要であると認識しながらも、技能のできばえに意識が向いていて、豊かなかかわり合いを育てるための具体的な支援が十分でなかったからと考える。教師は、もっと、仲間同士が豊かにかかわっていくために、個性の違う様々な友達の中で自分らしさを表現していけるようにしていかなければならない。それには、仲間にどのように言葉をかけたり、接したり、対処したりすればよいかといったコミュニケーション技術を高め、仲間とかかわり合う力をはぐくむことが重要であると考えた。

本研究では、仲間と協力してゲームを楽しむボール運動を取り上げた。ボール運動は、陸上運動や水泳のような個人的スポーツと違い、体力や運動技能、性格などの違いがある様々な友達が、チームの仲間として協力しなければ成立しない運動だからである。

しかし、このボール運動も自分に合っていない高度な運動技能や複雑な戦術的課題が求められたり、勝敗の結果のみが過度に強調されたりする場合には、豊かなかかわり合いを保障するとは言えない。仲間とかかわり合う力をはぐくむためには、技能や戦術に関する課題だけでなく、傾聴、賞賛、励ましなどのコミュニケーション技術の課題も重要となる。

そこで、「仲間のよいプレーに誉め言葉をおくる」「仲間のミスに励ましの言葉をおくる」

などの仲間とかかわり合うために必要な約束行動をコミュニケーションルールとしてボール運動に取り入れることとした。児童は、コミュニケーションルールをベースにゲームや話合いなどを繰り返し行うことにより、コミュニケーション技術が身に付き、仲間とかかわり合う力がはぐくまれると考え、本主題を設定した。

II　研究のねらい

仲間とかかわり合う力をはぐくむために、ボール運動にコミュニケーションルールを取り入れることが有効であることを実践を通して明らかにする。

III　研究の見通し

次のような過程においてボール運動にコミュニケーションルールを取り入れることにより、コミュニケーション技術が身に付き､仲間とかかわり合う力をはぐくむことができるであろう。

1　つかむ過程において、連帯感を高め合うことを第一と考えた仲間づくりゲームにコミュニケーションルールを取り入れれば、励まし合いや認め合いの技術が身に付き、自分のチーム内で、肯定的にかかわれるようになるだろう。

2　深める過程において、勝敗を意識した対抗ゲームにコミュニケーションルールを工夫して取り入れれば、勝敗に対する正しい態度がとれるようになり、自分のチームや相手チームと積極的にかかわれるようになるだろう。

IV　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)　仲間とかかわり合う力をはぐくむことについて

ここでいう仲間とかかわり合う力とは、仲間を誉めたり、励ましたり、また、仲間の意見に耳を傾けたり、仲間のアイデアを認めたりするといった、仲間と肯定的・積極的にかかわり合う力である。

本研究では、この力をはぐくむために、ボール運動に視点を当てた。

ボール運動は、相手チームと得点を競い合いながら勝敗を楽しむ運動である。そのため、勝敗によって感情が左右されやすい。勝敗の結果にかかわらず自分のチームによい雰囲気をつくり、みんなで成し遂げたという

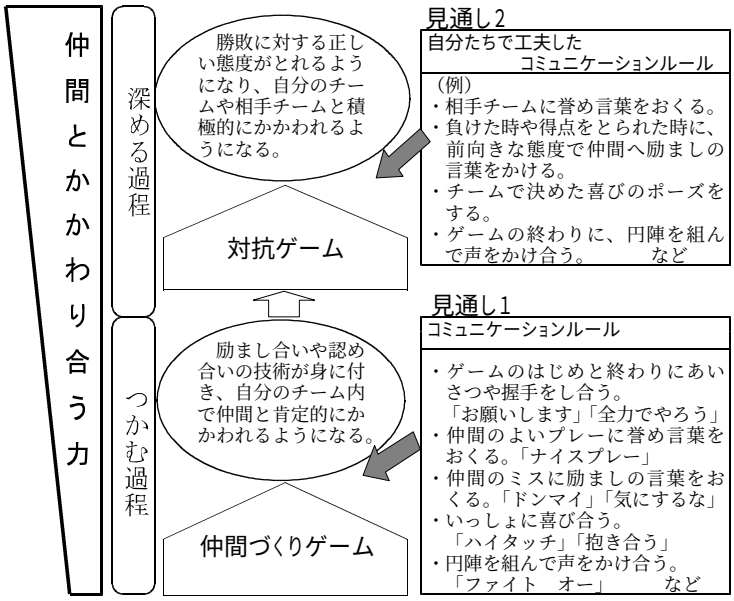


図1　研究構想図

一体感を味わうには、チーム内で誉め言葉などをおくったり、受け取ったりするなど、肯定的なかかわりが重要な要素となる。また、相手チームに負けて悔しい思いをした時など、ミスをした仲間や相手チームを非難せずに、勝敗に対する正しい態度をどうとったらよいかという積極的なかかわりも大切であると考えた。

本研究における、研究過程は図２の通りであり、手だては次のようになる。

	つかむ過程		深める過程	
オリエンテーション	仲間づくりゲーム		対抗ゲーム	
	リハーサルゲーム	ねらい１　仲間のよさを見付け、声をかけ合いながらルールを工夫してゲームを楽しむ（総当たり戦）	ねらい２　作戦を生かし、チームワークを高めてゲームを楽しむ（対戦相手を決めて）	ゲーム大会

図2　研究過程とゲームの関係

つかむ過程では、自分のチーム内の連帯感を高め合うことを第一と考え、チーム内で肯定的にかかわれるよう、仲間のよさを見付け、声をかけ合いながらルールを工夫して仲間づくりゲームを行う（ねらい１）。深める過程では、自分のチームや相手チームと積極的にかかわれるよう、勝敗を強く意識した時の励まし合いや相手チームへの賞賛の仕方を考え、作戦を生かし、チームワークを高めて、対抗ゲームを行う（ねらい２）。

このように、仲間との交流が多いボール運動において、段階的にコミュニケーション技術を身に付ければ、仲間とかかわり合う力がはぐくまれると考えた。

(2)　コミュニケーションルールを取り入れることについて

コミュニケーションルールとは、「仲間のよいプレーに誉め言葉をおくる」「仲間のミスに励ましの言葉をおくる」「いっしょに喜び合う」など、仲間とかかわり合うために必要な約束行動をルール化したものである。今までの体育の授業でもマナーや学習の約束として取り扱われてきたが、これをゲームや話合いの場にルールとして位置づけたものである。

まず、仲間づくりゲームの導入段階で、チームワークをよくするためには何が必要か話し合う。どんな時、どのようにコミュニケーションをとったらよいかという具体例をコミュニケーションルールとして児童に示す。児童はこれをベースに、チームや自分でできそうなことを選択し、実際に試してみる（リハーサルゲーム）。そして、その活動を振り返ってみることで、ルールの必要性を感じ取れるようにする。

次にねらい１、ねらい２、ゲーム大会へと進む。ねらい１では、技能や戦術の課題と併せて、コミュニケーションルールの中からチームや自分のめあてにすることを選び、それを、ゲームや話合いに取り入れていく。そして、コミュニケーションルールについても振り返りを行い、コミュニケーションルールを意識化していく。ねらい２やゲーム大会では、競争を意識したゲームのため、勝敗の結果により仲間同士やチーム間で様々な葛藤場面が想定される。勝っても相手への思いやりを忘れず、負けてもその悔しさをバネにしていけるようなコミュニケーションを考えていく必要がある。そこで、仲間づくりゲームに取り入れたコミュニケーションルールをチームで話し合い、工夫して積極的に取り入れていくようにする。

このように、ゲームや練習のほか、作戦会議、振り返りなどの場においても児童はコミュニケーションルールを積極的に活用していく。また、コミュニケーションルールを効果的に活用するために教師は、各活動場面において児童の姿を見とり、適切な支援をしていくことが必要であると考える。

2　研究の方法

研究の見通しに基づき、次のような計画で授業実践及び検証を行う。

(1)　授業実践計画

対　象	大間々町立福岡中央小学校６年１組 21名（男子16名、女子５名）
単元名	ソフトバレーボール
期　間	10月 9日から10月27日　９時間実施
授業者	長期研修員　　深代　　勉

(2)　抽出児

児童Ａ	勝敗に対してこだわりが強く、時々仲間に厳しい言葉かけをすることもあるので、チームの連帯感が高まるような言葉かけができるようにしたい児童
児童Ｂ	運動に対して苦手意識が強く、ゲームや練習では、自分の意見をほとんど言えないので、仲間に対して誉めたり、励ましたりする言葉かけができるようにしたい児童

(3) 検証計画

検証計画	検　証　の　観　点	検証の方法
見通し１	つかむ過程で、連帯感を高め合うことを第一と考えた仲間づくりゲームに「仲間のよいプレーに誉め言葉をおくる」「仲間のミスに励ましの言葉をおくる」のなどのコミュニケーションルールを取り入れることは、励まし合いや認め合いの技術が身に付き、自分のチーム内で肯定的にかかわれるようになるために有効であったか。	○学習活動の観察記録の分析（VTR） ○学習カードの分析
見通し２	深める過程で、勝敗を意識した対抗ゲームに仲間づくりゲームで取り入れたコミュニケーションルールをチームで話し合い工夫して積極的に取り入れていくことは、勝敗に対する正しい態度がとれるようになり、自分のチームや相手チームと積極的にかかわれるようになるために有効であったか。	○「集団的・協力的活動を評価する形成的評価」（※１）の分析

（※1） これは、体ほぐしの運動の導入に関連してチャレンジ運動の仲間づくりへの有効性を検証するために開発された（小松崎ほか、2001）ものである。この評価法は、仲間づくりに焦点化して調査項目が作成されているために、特定の運動技能や運動への理解は直接の評価の対象にはしていない。

Ⅴ　研究の展開

1　単元名と単元の考察

単元名	ソフトバレーボール
単元の考察	ソフトバレーボールは、二つのチームがネットをはさんでボールを返し合い、相手チームと得点を競い合って楽しむ攻守分離型の運動である。そのため、相手チームとの接触プレーが少なく、安全性も高い。それだけでなく、自分たちの作戦が立て易く、それを遂行する時も、相手に邪魔されることなくゲームに反映させられる。このことにより、チームの一人一人がプレーにかかわることができ、関心や学習意欲も高まることが期待できる。しかし、その反面、自己中心的なプレーに陥って、チームの連帯感を損なう危険性もある。そこで、一人一人の子供がコミュニケーションルールをベースに肯定的な仲間とのかかわり合いを学習していくことで、仲間との協力や責任感、公正などの社会性を身に付けることができる。また、得点が決まった時にハイタッチするなどの非言語によるコミュニケーションや作戦会議や振り返りの場での言語によるコミュニケーションなどを適切に支援していくことで仲間を励まし合ったり認め合ったりしながら、仲間と仲よく運動することができる。

2　単元の目標と評価規準

目標		互いに協力してルールや作戦を工夫しながら、チームワークを高めてソフトバレーボールのゲームを楽しむ。		
単元の評価規準		ア　運動への関心・意欲・態度	イ　運動についての思考・判断	ウ　運動の技能
		・チームに適した課題をもって、互いに教え合いながら練習やゲームに進んで取り組もうとする。 ・進んで友達とかかわり、よさを見付け認め合ったり、励まし合ったりしながら活動しようとする。 ・勝敗に対して正しい態度をとり、ルールやマナーを守って審判の判定に従おうとする。 ・協力して、準備や片付けをしようとする。	・チームのよさを生かした作戦を立てている。 ・作戦を成功させるための練習方法を選んでいる。 ・チームの特徴を知り、ルールを工夫している。	・ボールを両手や片手で操作し、味方につなげたり、相手コートに返したりすることができる。 ・自分のポジションや相手の状況に応じて、ボールをつなぎやすい位置に動くことができる。
学習活動における具体の評価規準	おおむね満足できる状況	①ソフトバレーボールで目指すゲームのイメージをつかもうとする。 ②運動する場や用具の安全を確かめ、運動しようとする。 ③自分の役割を果たし、協力して学習の準備や片付けをしようとする。 ④仲間のプレーに対して、声をかけながら活動しようとする。 ⑤勝敗に対して正しい態度をとり、ルールを守り、審判の判定に素直に従おうとする。	①自分たちのチームのよいところを考え、ルールを工夫している。 ②チームの課題から自分のめあてを考えている。 ③チームの課題に応じた練習方法を選択している。 ④チームで話し合い、自分たちのよさを生かす守り方や相手を意識したボールの返し方の作戦を立てている。	①ボールの落下点へ移動して、両手や片手でボールを操作をすることができる。 ②状況に応じてオーバーハンドとアンダーハンドの使い分けをしたり、ボールを両手や片手で操作したりすることができる。 ③ボールの方向へ体を向けて１歩踏みだし、カバーすることができる。
	十分満足できる状況	①ソフトバレーボールで目指すゲームのイメージを具体的につかもうとする。 ②いつも運動する場や用具の安全を確かめ、運動しようとする。 ③自分の役割を果たし、自分から進んで協力して学習の準備や片付けをしようとする。 ④仲間のプレーに対して、タイミングよく声をかけながら活動しようとする。 ⑤勝敗に対して正しい態度をとり、いつもルールを守り、審判の判定に素直に従おうとする。	①自分たちのチームのよいところをゲームや練習の反省を基に考え、ルールを工夫している。 ②チームの課題解決に向けて、自分の役割を意識しためあてを考えている。 ③チームの課題に応じた練習方法を選択し、改良しようとしている。 ④チームで話し合い、自分たちのよさを生かす守り方や相手の特徴を分析し、相手を意識したボールの返し方の作戦を立てている。	①ボールの落下点へすばやく移動して、両手や片手でボールを正確に操作をすることができる。 ②状況に応じて的確にオーバーハンドとアンダーハンドの使い分けをしたり、ボールを両手や片手で正確に操作したりすることができる。 ③ボールの方向へ体を向けて１歩踏みだし、すばやくカバーすることができる。

3　指導と評価の計画

※アイウ及び①～④は、前ページの評価規準による

過程	ねらいと主な学習活動	学習への支援・留意点	時間	学習活動における具体の評価規準（評価方法） 関心・意欲・態度	思考・判断	技能	ゲーム
	オリエンテーション ○学習のねらいを知り、単元の見通しをもつ。 ・学習のねらいを知る。 ・チーム編成をする。 ・学習の約束や役割を決める。 ・試しのゲームをする。	○学習課題を明確にもてるよう、図やＶＴＲなどを利用してゲームのイメージ化を図る。 ○チームの力が均等になるように配慮し、児童と相談しながらチーム編成をする。 ○全員が十分ボールに触れられるよう、試しのゲームでは、易しい条件を提示する。	1	ア ① （学習カード）			
つかむ	○チームワークをよくするためには、誉め合ったり励まし合ったりすることが大切であることに気付く。 ・チームワークには何が大切か話し合う。 ・試してみる誉め言葉や誉め言葉の受け取り方などを決める。 ・リハーサルゲームをする。 ・活動を振り返る。　【見通し１】	○ゲーム中に誉め合ったり励まし合ったりする具体的な様子に気付くよう、スポーツの映像を見る場を設定する。 ○仲間に対し、どのような言葉で誉めたり、それを受け取ったりしたらよいか決められるよう、誉める言葉や行動の一覧表を提示する。（コミュニケーションルール） ○他の児童にも参考にしようと思えるよう、コミュニケーションルールが守れている児童を、積極的にみんなの前で賞賛する。 ○仲間に誉めてもらったり、誉めたりした時の気持ちや感想を伝え合うように助言する。	2	ア ④ （観察・VTR）			仲間づくりゲーム
	ねらい１ ○仲間のよさを見付け、声をかけ合いながらルールを工夫してゲームを楽しむ。（総当たり戦） ・用具や場所の準備をする。 ・チーム毎に準備運動をする。 ・ボール慣れの運動をする。（個人技能をドリルにしたもの） ・本時のめあてとルールを確認する。（含コミュニケーションルール） ・ゲーム１をする。 ・ゲーム２をする。 ・ゲーム３をする。 ネット 170cm ボール 100g １ゲーム ７点制 ・ゲームを振り返り、まとめをする。（含コミュニケーションルール） 【見通し１】 ・後片付けをする。	○安全に留意しながら準備や片付け、係の活動を進めているチームを全体の場で賞賛する。 ○個人技能の基礎練習を意識したボール慣れの運動を絵図（技能パネル）でたくさん紹介する。 ○チーム内で仲間のめあてが確認できるよう、各自がコミュニケーションルールのめあてをホワイトボードに書くことを助言する。 ○ゲーム中のフォーメーションを確認できるよう、作戦板を使うことを助言する。 ○オーバーハンドやアンダーハンドのボール操作ができない児童には、教師が積極的にかかわるようにする。 ○ゲーム結果の記録だけでなく、それを生み出した原因を振り返るように助言する。 ○チーム内での存在感が高まるよう、振り返りの場において「誉めたい人」を決め、仲間の前で誉め言葉をおくることを助言する。	3	ア ② （学習カード・観察）		ウ ① （観察）	
			4	ア ③ （学習カード・観察　）	イ ② （学習カード・観察）		
			5		イ ③ （学習カード・観察）		
深める	ねらい２ ○作戦を生かし、チームワークを高めてゲームを楽しむ。（対戦相手を決めて） ・用具や場所の準備をする。 ・チーム毎に準備運動をする。 ・ボール慣れの運動をする。（集団技能をドリルにしたもの） ・本時のめあてと対戦相手を確認する。（含コミュニケーションルール） ・ゲーム１をする。 ・反省と練習 ・ゲーム２をする。 ネット 180cm ボール 100g １ゲーム 14点制 ・ゲームを振り返り、まとめをする。（含コミュニケーションルール） 【見通し２】 ・後片付けをする。	○勝っても相手への思いやりを忘れず、負けてもその悔しさをバネにしていけるようなコミュニケーションを考えていくために、仲間づくりゲームに取り入れたコミュニケーションルールをチームで話し合い工夫して積極的に取り入れていくように助言する。 ○コミュニケーションルールの意識が高まるよう、児童が互いにかけ合う言葉を黒板に掲示し、紹介する。 ○コミュニケーションルールがうまくいっている場面では、ゲーム内容と関連させて積極的に賞賛する。 ○互いに誉め合ったり、励まし合ったりしたよさを発表する場を設ける。 ○ゲームの反省を生かし、作戦や練習を考えられるように助言する。 ○コミュニケーションルールが守られていたかどうかも話し合っていくように助言する。 ○自分もチームの一員であるという自信がもてるよう、振り返りの場で、椅子に座った仲間へ、順番に誉め言葉とハイタッチをすることを助言する。	6		イ ① （学習カード・観察）	ウ ③ （学習カード・観察）	対抗ゲーム
			7	ア ④ （学習カード・観察）		ウ ② （観察）	
			8	ア ⑤ （観察）	イ ④ （学習カード・観察）		
	○みんなが楽しめるルールを決めて、ソフトバレーボール大会をして楽しむ。 ・作戦会議と練習をする。 ・対抗戦ゲームをする。 ・学習のまとめをする。 【見通し２】	○チームワークを大切にして全力を尽くすように助言する。 ○ゲーム中のフォーメーションを確認できるよう、作戦板を使うことを助言する。 ○自然にコミュニケーションルールがよく守れている児童やチームを賞賛する。 ○運動を楽しむためには、仲間とのかかわり合いが大切であることを強調して振り返るように助言する。	9	ア ④ （観察・VTR）			

Ⅵ　研究の結果と考察

1　つかむ過程で、連帯感を高めることを第一と考えた仲間づくりゲームに「仲間のよいプレーに誉め言葉をおくる」「仲間のミスに励ましの言葉をおくる」などのコミュニケーションルールを取り入れることは、励まし合いや認め合いの技術が身に付き、自分のチーム内で肯定的にかかわれるようになることに有効であったか

「ソフトバレーボールでは何が大切か」と問いかけると「チームワーク」という答えが返ってきた。そこで、「チームワークとは何か」について話し合った。児童からは、「協力すること」「助け合うこと」「文句を言わないこと」などの意見が出た。そして、実際に小学生バレーボール大会のVTRを視聴した後、児童から意見を再度聞くと「声を出して盛り上げている」「ポイントが決まるとみんなでハイタッチをしている」「ミスした仲間を励ましている」などの意見が出された。ここで、コミュニケーションルールを児童に紹介し、自分たちも試してみようと助言した。児童は、コミュニケーションルールの中から試してみることを決め、チーム毎に風船を使って実際にリハーサルゲームを行った。資料１から資料３は、その時の様子である。チーム毎に円陣を組んで声をかけ合ったり、互いにハイタッチをしたりした。そして、「ナイス」「ドンマイ」「ハイ、○○ちゃん」などと仲間に言葉かけし、コミュニケーションルールを実際に試し、活動を振り返った。資料４は、その日の感想で、「声をかけ合うと気持ちいい」「これならチームワークがよくなると思った」「仲よくやれそうな気がした」「これからもっともっとチームワークをよくするためにみんなで声をかけ合ったり、誉め合ったり励まし合ったりしていきたい」など、チームワークをよくする上で、コミュニケーションルールが必要であると感じたことがわかる。そして、単元全体を貫くテーマを児童と共に話し合い、「目指せ！チームワーク№１」と設定した。

資料１　円陣を組む

資料２　ハイタッチ

資料３　言葉かけ

資料４　リハーサルゲームの感想

- 声をかけ合うと気持ちいい気がする。
- チームワークを少しつかんだ気がする。
- これならチームワークがよくなると思った。
- これからもっともっとチームワークをよくするためにみんなで声をかけ合ったり、誉め合ったり励まし合ったりしていきたい。
- 仲よくやれるような気がした。
- 声をかけ合っていると自然に楽しそうな顔になっていた。
- 試合中も自分から声をかけるようにがんばりたい。
- ドンマイと言ってくれてうれしかった。円陣を組む時もっと大きな声を出せばよくなると思った。
- 声をかけるのもうれしいし、声をもらうのもうれしい。
- ハイタッチも手を高くあげてやるととても気持ちよかった。
- 声を出し合ったら、少しチームワークがよくなったと思った。これからも少しずつチームワークをよくしていきたい。

第３時からのソフトバレーボールでは、毎時間、コミュニケーションルールについてのめあてを話し合ったり、振り返ったりする時間を設けながらゲームを繰り返していった。次第に、誉め言葉や励ましの言葉を仲間へおくる姿が多くなり、コミュニケーションルールも意識化されていった。得点が決まった時のハイタッチは、特にチームの雰囲気を盛り上げていくことにつながった。言葉かけに慣れてきた児童は、「○○ちゃんナイス」「ナイスレシーブ」「気にするなよ」「次があるよ」など、言葉かけの種類を増やしていった。

抽出児Ａ（以後Ａ）は、リーダーとして話合いやゲームの中心になり、「声出していこう」「ドンマイ、ドンマイ」「気にしないで」「作戦は、○○でいこう」など、しきりに仲間へ言葉かけをしていた。しかし、Ａの言葉かけに対し、他の仲間からの返事は小さく、一方向のコミュニケーションになっていて、相互コミュニケーションが少なかった。そこで、「誉め言葉や励ましの言葉

をおくられた時には、きちんと返す」というコミュニケーションルールを全員で確認した。その後、教師はAに「Aちゃんのチームは、一人一人が自分の意見を言えるようになるともっとチームワークがよくなるね。」と励ました。これにより、Aは作戦会議の時（資料５）、「作戦板を使って一人ずつ自分の動きを説明しようよ。」と仲間へ伝えた。Tが「H君がここからアタックを打ってくるとするよ。そしたらおれはここでブロックする。」と言って磁石を作戦板の上で動かした。すると次々に「おれもここでブロックする。」「私はその時ここでレシーブかな。」と一人一人が自分のポジションにおける動きを説明していった。このように、Aの言葉かけにより、チーム内で自分の役割を確認し合えた。Aは、授業後の感想でチームワークで大切なことは、「一人一人が意見を言ったり、みんなが仲間の意見を大切にすることだ」と書いている。

資料５　作戦会議の様子

抽出児Ｂ（以後Ｂ）は、ゲームを重ねるごとに仲間と喜び合う時は、「ハイタッチ」をし、仲間のよいプレーに対しては、「拍手」をおくるなど態度で仲間へ誉めたい気持ちを伝えていた。しかし、運動に苦手意識をもっていて、ゲーム中は「ナイス」や「ドンマイ」と言葉かけするものの、声が小さく、うまく仲間に伝わっていなかった。仲間から「がんばって声出していこう」と励ましの言葉をかけられるが、それが、かえってＢにはプレッシャーとなっていた。そこで、ゲーム以外の振り返りの場で、一人一人に誉め言葉をおくってみようと助言した。その日の振り返りで、MはＢの正面に立ち、Ｂの顔を見ながら「ぼくの誉めたい人は、Ｂちゃんです。」「Ｂちゃんは、強いボールにも向かっていくし、ボールがコートの外にいってもあきらめずに全力で追いかけているところがすごいです。」と誉め言葉をおくりハイタッチをした（資料６）。それに対しＢは「ありがとう。」と満面の笑顔で言葉を返した。その後、Ｂは「私の誉めたい人は、Ｔ君です。なぜかというと、Ｔ君はブロックもよかったし、アタックも打っていたからです。」と自分の気持ちを仲間に伝えることができた。Ｔ君から「ありがとう。」と返され、照れくさいようだった。Ｂはこの日の感想に「M君は、私の細かいところまでよく見ていてくれてうれしかった」「Ｔ君に誉め言葉を言う時、すごくドキドキした」と書いている。次の日Ｂは、「今日は、大きな声を一度でいいから出す」を自分のめあてにしている。このように、ゲーム中に大きな声で言葉かけをすることが苦手なＢは、「ハイタッチ」や「拍手」といった非言語によるコミュニケーションやゲーム以外の振り返りなどの場で言語によるコミュニケーションを身に付けることができた。

資料６　振り返りの様子

これらのことから、コミュニケーションルールは、ゲーム中やゲーム以外の場において有効に働いたといえ、仲間づくりゲームにコミュニケーションルールを取り入れることは、励まし合いや認め合いの技術が身に付き、自分のチーム内で、仲間と肯定的にかかわり合えるようになったといえる。

2　深める過程において、勝敗を意識した対抗ゲームにコミュニケーションルールを工夫して取り入れることは、勝敗に対する正しい態度がとれるようになり、自分のチームや相手チームと積極的にかかわれるようになるために有効であったか

深める過程では、対抗ゲームを行い、どのチームもコミュニケーションルールに慣れ、情緒的な言葉かけだけでなく、「トス上げて」「ブロックカバー」など、技術的な言葉かけもする

ようになってきた。資料７のように、３段攻撃をするチームも見られ、またそれをブッロクでとめるなど技能面にも向上が見られた。

対抗ゲームでは、どのチームも勝敗を強く意識しはじめ、ハイタッチや言葉かけなど、雰囲気を盛り上げる言動が自然と活発になってきた。ねばり強くボールをつなぎ得点をとった時や強いチームに勝った時は、さらにチームの一体感を高めていった。その反面、勝敗に強くこだわる児童が仲間やチームのミスに対し非難したり、技能の低い児童に対し、言葉かけが厳しくなったりする場面もあった。「チームワークを崩す時はいつなのか」について話し合うと、児童から「得点をとられた時」「負けそうになっている時」「ゲームに負けた後」という意見が出た。ここで対抗意識が強い時ほど、コミュニケーションルールが大切で、今までのコミュニケーションルールを工夫してみようと助言した。その後、児童は、「負けている時や負けた後の言葉かけ」「ゲーム終了時の円陣」「相手チームにおくる言葉かけ」の３点を各チームで工夫していくことにした。

四班は「肩をたたきながら、誉め言葉や励ましの言葉をおくる」をめあてとした。資料８のように強いアタックに飛びついてコートに転がった仲間に対し、すぐさま近寄り、肩をたたきながら「ドンマイ、ドンマイ」「気にしない　気にしない」「おしいよ」と励ましていた。また、一班は「相手チームに誉め言葉をおくる」をめあてとした。資料９のようにゲームのはじめと終わりに握手をしながら「トスがんばんべえ」とか「アタックすごかったよ」と相手チームに誉め言葉をおくった。おくられた相手は、笑顔で「ありがとう」と返している。一班は、ゲームに負けると、ボールをおもいきり壁に打ちつけるなど自己中心的な行動が目立っていたが、試合に負けたにもかかわらず相手チームへ誉め言葉をおくっている。このように、各チームでコミュニケーションルールを工夫し、積極的に取り入れていった。

Ａのチームは話合いで「オリジナルな円陣を考え、一人一人が言葉を言う」「負けている時こそ、声を出す」「振り返りの時、仲間に誉め言葉をおくる」の三つをチームのめあてにした。また、Ａは、「『ドンマイ』と一緒に肩もたたいて励ます」を自分のめあてにした。

資料７　技能の向上

資料８　肩をたたいて

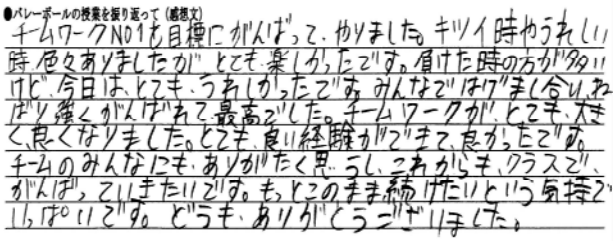
資料９　相手チームと握手

資料10　オリジナルの円陣

Ａのチームは、先発メンバーだけでなく必ず全員で円陣を組むことに決め、手を突き上げるオリジナルな円陣でチーム内の雰囲気を高めていった（資料10）。Ａは、レシーブをミスしたＴに対し「ドンマイ、ドンマイ。」と声をかけながら肩をたたいて励ました。言葉と一緒にスキンシップもできるようになり、一人一人の距離が縮みチームの輪が近くなった。そして振り返りでは、一人一人が誉めたい人の前で、誉め言葉をおくった。ＡはＫに対し、「『がんばろう』って私が言うといつも大きな声で返事を返してくれてありがとう。」と感謝の言葉をおくった。また、ＡはＴから「いつもリーダーとしてみんなを励ましてくれているところがすごいで

す。」と誉め言葉をおくられた。Ａのチームは、最終のバレーボール大会で善戦したものの全敗してしまった。資料11は、バレーボール大会直後に書いたＡの感想である。これを見ると、「チームのみんなにもありがたく思う」と書いてあることから、リーダーとして仲間を支えるだけでなく、互いに支えたり支えられたりする関係が大事であることに気付いている。そして、「負けてもみんなで励まし合い、ねばり強くがんばったことが最高でした」と書いている。最後に、チームを超えて「クラスでもがんばっていきたい」とチームワークがバレーボールだけでなく学級においても大切な人間関係を築くものだと気付いたと考える。

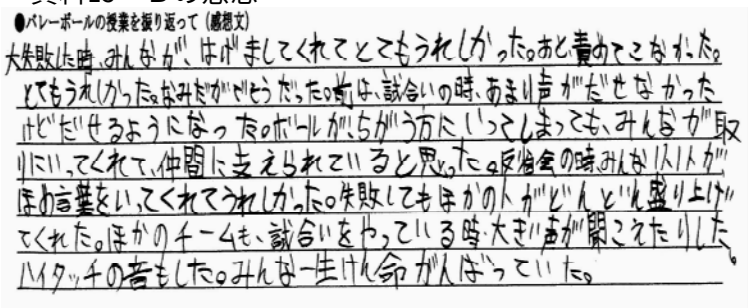
資料11　Ａの感想


●バレーボールの授業を振り返って（感想文）
チームワークNO1を目標にがんばって、やりました。キツイ時やうれしい時色々ありましたが、とても楽しかったです。負けた時の方が多いけど、今日は、とても、うれしかったです。みんなで励まし合いねばり強くがんばれて最高でした。チームワークが、とても、大きく、良くなりました。とても、良い経験ができて、良かったです。チームのみんなにも、ありがたく思うし、これからも、クラスで、がんばっていきたいです。もっとこのまま続けたいという気持でいっぱいです。どうも、ありがとうございました。

Ｂは仲間のよいプレーに対し、積極的にハイタッチを行えるようになった。ゲーム中の言葉かけも多くなり、前より大きな声で「ドンマイ」と言えるようになった。円陣を組む時は、仲間が次々に自分で考えた「盛り上げる言葉」をかけ、それに合わせてＢも「がんばっていこう」と言えた。また、ゲーム中にファインプレーをした仲間に対し、自分から肩をたたいて誉めることができた。これは、運動に自信のないＢが、「失敗しても仲間を非難しない」というコミュニケーションルールが授業の枠となり、まわりに肯定的にかかわってくれる仲間や受容的な態度で受け入れてくれる仲間の中で、自信をもちはじめたといえる。Ｂは最終戦、あと１点で勝負が決まる大事な場面でミスをしてしまった。しかし、チームの仲間がＢに近寄り「Ｂちゃん気にしない気にしない。」「絶対大丈夫だからね。」「ドンマイ、ドンマイ。」と肩をたたいて励ました（資料12）。直後、コート内で、「円陣組もう、円陣組もう。」とリーダーが言うと力強い声で、「がんばったぞー」「オー」という声が体育館を響き渡った。熱戦の末、負けてしまったが、さわやかな終わりぶりであった。資料13は、Ｂがその日に書いた感想である。これを見ると、Ｂは仲間に支えられながらチームで連帯感を味わえたことがわかる。

資料12　励まされる

資料13　Ｂの感想


●バレーボールの授業を振り返って（感想文）
大失敗した時、みんなが、はげましてくれてとてもうれしかった。あと、責めてこなかった。とてもうれしかった。なみだがでそうだった。前は、試合の時、あまり声がだせなかったけどだせるようになった。ボールがちがう方にいってしまっても、みんなが取りにいってくれて、仲間に支えられていると思った。反省会の時みんなはげましの言葉をいってくれてうれしかった。失敗してもほかのトがどんどん盛り上げてくれた。ほかのチームも、試合をやっている時、大きい声が聞こえたりした。ハイタッチの音もした。みんな一生けん命がんばっていた。

本研究は、単元を通して、ボール運動における仲間とのかかわり合いの効果をみるために「集団的・協力的活動を評価する形成的評価」を行った。

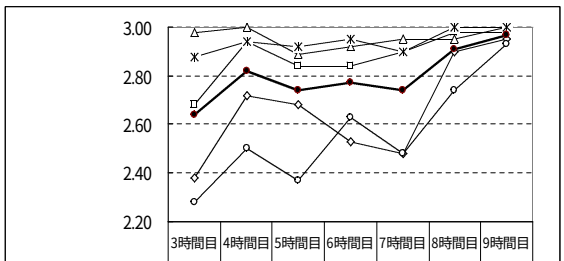
調査票（資料14）は、項目１・２が「集団達成」、３・４が「集団思考」、５・６が「集団相互作用」、７・８が「集団的人間関係」、９・10が「集団的活動の意欲」の５因子に対応

資料14　調査票の質問項目

1　あなたのチームは、今日課題にしたことを解決することができましたか。
2　あなたは、チームのみんなで成しとげたという満足感を味わうことができましたか。
3　あなたのチームは、友だちの意見に耳を傾けて聞くことができましたか。
4　あなたのチームは、課題の解決に向けて積極的に意見を出しあうことができましたか。
5　あなたは、チームの友だちを補助したり、助言したりして助けることができましたか。
6　あなたは、チームの友だちをほめたり、励ましたりしましたか。
7　あなたは、チームがひとつになったように感じましたか。
8　あなたは、チームのみんなに支えられているように感じましたか。
9　あなたは、今日取り組んだ運動を楽しむことができましたか。
10　あなたは、今日取り組んだ運動をもっとやってみたいと思いますか。

している。なお、授業終了後に調査票を記入し、「はい」を３点、「どちらでもない」を２点、「いいえ」を１点に換算して処理した。

資料15　形成的授業評価（全体・因子別）



	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目	7時間目	8時間目	9時間目
集団達成	2.38	2.72	2.68	2.53	2.48	2.90	2.95
集団思考	2.68	2.94	2.84	2.84	2.90	2.98	2.98
集団相互作用	2.98	3.00	2.89	2.92	2.95	2.95	3.00
集団的人間関係	2.28	2.50	2.37	2.63	2.48	2.74	2.93
集団的活動の意欲	2.88	2.94	2.92	2.95	2.90	3.00	3.00
クラス全体	2.64	2.82	2.74	2.77	2.74	2.91	2.97

資料15は、「集団的・協力的活動を評価する形成的評価」の結果である。これを見ると、クラス全体の評価は、おおむね右上がりに推移している。単元終了時は、2.97と評価が高い。これは、仲間づくりゲームから対抗ゲームに進むにつれ、仲間と肯定的・積極的にかかわれるようになっていったといえる。次に因子別にみると、「集団的相互作用」と「集団的意欲」は、単元を通して高い評価を示している。これは、コミュニケーションルールを示したことにより、児童に具体的な仲間への励まし方などがわかりやすかったためだと考える。それに対し、「集団的人間関係」と「集団達成」は、はじめから高い評価ではない。勝敗に強くこだわる児童が対抗ゲームになって自己中心的な行動をとり、練習方法を仲間と相談せずに勝手に決めてしまうなどが原因で、評価が一時期落ち込む場面も見られる。しかし、その後、コミュニケションルールをチームで工夫して積極的に取り入れていくことにより、今まで以上にチームワークが高まり、仲間との一体感やチームでの連帯感を味わえたといえる。単元終了時は、「集団的人間関係」の評価が2.93と高く、最後の大会で全敗したチームも2.92と高い評価をしている。これは、勝敗を強く意識しているゲームこそ、コミュニケーションルールが大切であり、勝敗にかかわらず、仲間同士の肯定的・積極的なかかわり合いにより､チーム内で仲間と一体感を味わうことができたといえる。

以上のことから、勝敗を意識した対抗ゲームにコミュニケーションルールを工夫して取り入れることは、勝敗に対する正しい態度がとれるようになり、自分のチームや相手チームと積極的にかかわれるようになるために有効であったといえる。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　仲間とかかわり合う力をはぐくむために、ソフトバレーボールにコミュニケーションルールを取り入れたことは、仲間とのかかわり合いを改善していくのに有効であった。特に、円陣を組んでかけ声をかけたり、ハイタッチをしてみんなで喜び合ったりすることは、チーム内での連帯感を味わうことに大きく結びついていた。

○　振り返りの場で、一人一人が椅子に座っている仲間に正対し、自分の言葉で、自分の気持ちをしっかり伝え、ハイタッチをし合って、誉め言葉をおくった。それに対し、「『ありがとう』と受ける」というルールが、チームの仲間に認められ、自分の居場所を感じ、連帯感を味わうことにつながっていた。

○　コミュニケーションルールを取り入れたことにより、仲間に対し肯定的な言葉かけが増えた。しかし、その言葉かけは、仲間のミスを励ますなどの情緒的な言葉かけが多く、今後、技能的なサポートとしての言葉かけを多くするための手だてを工夫していきたい。

＜主な参考文献＞

・高橋健夫　著　『体育授業を観察評価する』　　明和出版(2003)
・グローバー　著　『チャレンジ運動による仲間づくり』　　大修館書店(2000)
・市村操一　著　『体育授業の心理学』　　大修館書店(2002)